

シーボルトの生涯とその実像

榎 良生

1. はじめに

かつて江戸時代も後期、19世紀の初め文政のころ長崎・出島にやってきたドイツ人の医師シーボルト、彼の生涯は調べれば調べるほど興味が尽きない。腕の良い名医、近代的医学の伝道者という評価がある一方で、その膨大なコレクションを見ると日本をこよなく愛した人だったことが彷彿される。本当の姿はどうだったのだろうか。

また、幕閣を巻き込んで大スキャンダルに発展した「シーボルト事件」とは一体何だったのか。これまでの通説では1828年（文政11年）8月に長崎に来航したコルネリス・ハウトマン号は9月17～18日に長崎を襲った暴風雨（シーボルト台風）のため座礁してしまった。奉行所の役人が現場に駆けつけたところ、積荷から日本地図などの禁制品が多数発見され、これが事件の発端になったとされていた。ところが近年、これが後日の創作であることが梶輝行氏によって明らかにされた（『鳴滝紀要第6号、1996年』）。船に積み込まれていたのは、船体を安定に保つための銅500ピコルだけで、臨検も無かったというのである。そして没収されたコレクションの大半はその後返却されたのである。そうすると事件は従来の解釈とは違った様相を示すことになるのである。

昨年10月オランダ・ライデンの博物館研究員の発表によると、シーボルトが持ち帰った作者不明とされていた6枚の絵画が浮世絵師の葛飾北斎の作品だったとのことである。彼は西洋画の技法に挑戦した訳だが、なんとシーボルトとも交流があったのである。今回は主人公のシーボルトに焦点を充てて、彼の足跡をたどりつつ、謎に満ちたその実像に迫りたいと思う。

2. シーボルト来日前の状況

江戸幕府は1639年ポルトガル人の来航を禁じ、1641年には平戸にあったオランダ商館を出島に移し、こののち200年にわたる鎖国体制が完成した。シーボルトが来日したのは1823年（文政6年）から1829年（文政12年）に至る7年間である。このころは化政時代と呼ばれ江戸の文化の熟覧期にあたっていた。これより約100年前の1720年（享保5年）8代将軍吉宗はキリスト教以外のオランダ書籍の輸入を解禁しており、シーボルト来日の際には医学をはじめとした西洋の学問に対する関心が非常に高まっていたのであった。蘭学を学びたいという気運は全国に広まっていたのである。後に彼が鳴滝塾を開くと門下生が全国から集まってきたのは、こうした土壌がすでに醸成されていたことが基盤にあったのである。

それでは次に当時の世界情勢を見てみよう。1789年フランス革命が勃発すると、革命軍はオランダに侵入しこれを占領した。その後、ナポレオンが台頭すると彼の弟、ルイ・ボナパルトを国王とするホラント王国を設立した。ルイが大陸封鎖令に従わないと見るやこれを廃して、フランス帝国に併合した。これに対してイギリスは東南アジアにあったオランダの植民地を攻撃し、大半を占領したのである。従って19世紀の初め、オランダは一時国家としての存在を失っていたのである。

1813年ナポレオンはライプチヒの戦いで敗れ、その後復活するも1815年ワーテルローの戦いで最終的に敗北するとオランダは独立を回復し、それに伴って東インドの植民地もイギリスから返還された。オランダにとって国家財政の立て直しが急務であり、植民地経営についてもその強化を狙いファン・デル・カペレンを東インド総督として派遣したのである。ナポレオン戦争中、本国と植民地の間の連絡は途切れており各地の現状についての情報は無かった。このため本国から多数の調査員、科学者、画家などが派遣されて、国土・地理・歴史・物産・有用な動植物などの調査がなされたのである。日本についても対日貿易の振興のために総合的な調査を行うことが検討された。『花の男シーボルト』（大場秀章著）によると、オランダに対する日本側の受けを良くするための、日本への文化的貢献もその視野に入れていた。そこでオランダが打ち出した政策は、日本で特に歓迎されると考えられる医学の振興であった。（中略）商館の医師は他の職員よりも多くの自由が許されていることも正しく洞察していた。そこで優秀な科学的才能をそなえた医師を派遣するならば、科学的調査と同時に、医療と医術の伝授という文化政策を並行してできる、と判断されたのである。

3. シーボルトの登場

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは1796年（寛政8年）2月17日ドイツ・バイエルン王国のヴェルツブルクで生まれた。祖父も父も医者で医学部の教授を勤めていた。シーボルトがまだ2歳にもならない時に父が慢性肺炎で急死し、兄も妹も夭折していたので、母アポロニアは一人息子と伯父フランツ・ヨゼフ・ロツのもとに引き取られてそこで彼は育てられた。伯父のもとで教育を受けたシーボルトは1815年ヴェルツブルク大学医学部に進む。そのころ、この大学には多くの科学者が来ており、医学に加え、動物学、植物学、化学、物理学、さらには人類学、民俗学など多くを学んだと言う。その一方で在学中のシーボルトは鼻持ちならない男でもあったらしい。自分が名門の出だという誇りと自尊心が人一倍強かったようで、「尊大で権力好き、無遠慮」とか「目的を達成するためには、自分や他人に危険を及ぼすようなことがあっても意に介さない性格である」等の酷評が残されているほどである（『花の男シーボルト』（大場秀章著）からの抜粋）。1820年、シーボルトは医学部を卒業し、外科、内科、産科の博士号を得た。その後、母の住んでいたハイディングスフェルトで開業医を始めたのであった。

シーボルトは未開の地で動・植物学や民俗学の研究をしたいという夢を持っていた。この夢は開業して2年目、伯父のロツがやはり伯父にあたるヨハネス・フォン・シーボルトに相談したことで実現した。彼はオランダ軍医総監フランツ・ヨゼフ・ハルバウルにシーボ

ルトの就職を依頼したのである。この回答は軍医になってオランダに勤務し、東インドに行く気があるなら世話をするというものであった。シーボルトがこれに飛びついてアジア行が決まったのである。

1822年（文政5年）6月7日シーボルトはヴェルツブルクを出発した。ハーグに到着したのは7月19日である。そこで東インド陸海軍軍医総監部から東インド陸軍外科軍医少佐の辞令を受けたのだ。これは当時破格の待遇だったという。こうして彼は1822年9月23日、ロッテルダム港から300トンのフリゲート艦「ヨンゲ・アドリアナ号」に乗り込み、ジャワのバタビアに向けて出発した。大西洋を一路南下し、アフリカの南端喜望峰を回ってインド洋へ抜け、これを横断した。長い航海を終えてバタビアに着いたのは、5か月後の翌年2月13日のことだった。シーボルトは早速砲兵連隊の軍医として配属された。彼の技術や知識の高さが東インド政庁の総督ファン・デル・カペレン男爵の知るところとなり、彼の別荘に迎えているのである。カペレンはシーボルトを高く評価し、長崎・出島のオランダ商館の医師兼学術調査官として、日本に派遣することを決めたのであった。シーボルトを日本人と交流させ、これを通して情報を収集しようとしたのである。1823年（文政6年）6月28日、シーボルトは新任の商館長スチュルレル大佐とともにバタビアを出航した。彼らに乗せた「ドリー・ヘズステルス号」は8月11日長崎に到着したのである。上陸に際してオランダ語を流暢に話す通詞から出身を疑われたという。この時シーボルトは若干27歳の若者であった。

4. 出島での活動

シーボルト来日より20年前、ナポレオン戦争のさなか、商館長のヘンドリック・ドーフは日本人との友好関係の構築に尽力した。蘭日辞典『ドーフ・ハルマ』も彼により編纂されたものである。後任の商館長ヤン・コック・ブロンホフもこれを引き継ぎ友好関係を発展させたのである。2代にわたる努力の成果を新任のスチュルレルに引き継いだのである。前商館長のブロンホフは帰国を前に、これまでの人脈（美馬順三、湊長安、高良斉、二宮敬作、伊東玄朴ら）を紹介したという。シーボルトの多くの成果には、2代にわたる商館長の貢献があったことを忘れてはならないのである。

1823年（文政6年）11月、シーボルトはオランダ語で博物学と医学を教えている。翌年にはスチュルレル商館長の長崎奉行高橋越前守への推薦もあって、長崎市内の蘭方医吉雄幸載や楢林栄建・宋建が自宅で開いていた私塾に出張して医学教育をすることが許可された。シーボルトは長崎市内で診察をおこない、病気の治療をしたことで名声が高まった。長崎に名医現るとの知らせは瞬く間に全国にもたらされた。高野長英は手紙の中で「江戸での1年の勉学はほんの豊の上の水練、長崎での勉学はわずか半年でも実戦と同じ」と記している。その結果全国から多くの医師がシーボルトのもとに集まったのである。鎖国体制の下、商館員すら出島から自由に出入りできない中で、出島の外で診療を行うことは異例中の異例であった。塾生の数が増えたので私塾では手狭になったので塾の移転を奉行は許可した。移転先は長崎近郊の鳴滝谷であった。購入した民家を鳴滝の館と呼んで、門弟たちは熱心に勉学に励んだのである。最初の塾頭は、いずれも阿波出身の美馬順三と高良斉、ついで

岡研介だった。

シーボルトは門人たちにそれぞれ関心のあるテーマでオランダ語による論文作成を依頼した。美馬順三は「日本古代史」、高野長英は「茶の栽培」「鯨及び捕鯨について」などの論文を提出した。これに対して、シーボルトは独自の学位証書を与えたのである。こうして彼は居ながらにして、日本の各地の動植物や風俗、その他各種の情報を収集することが可能になったのである。また、シーボルトにはカメラ代わりに川原慶賀（登与助）という町絵師がいて、各種絵画を描いていた。このほかにも諸国の産物や動植物の標本などが集められていたのであった。

1823年（文政6年）秋、シーボルトはたきという女性と知り合った。出島へは遊女以外は立ち入りを禁じられていたので、丸山の置屋引田屋の抱え遊女となり其扇（そのぎ）という呼び名で彼のもとへと行ったのである。シーボルトは、植物の中でアジサイに魅せられ、それに愛する妻の名前をとって、ヒドランゲア・オタクサと名付けたのである。1827年（文政10年）5月、江戸参府の翌年、たきは長崎・銅座の実家で娘のいねを生んだ。シーボルトは母子を出島に呼んで一緒に暮らすことになったのであった。

5. 江戸参府

オランダ商館長は当時4年に一度江戸へ行き、将軍に面会し様々な品物を献上することになっていた。この江戸参府にシーボルトも同行することになった。1826年の参府者は商館長スチュルレル、医官シーボルト、書記ビュルゲルの3名のオランダ人と日本人は役人、通詞、人夫、料理人など57名にのぼった。このほか、シーボルトの助手として、高良斎、二宮敬作、石井宗謙、川原慶賀などの門弟や絵師も同行させた。彼らはいたる所で観察収集、スケッチを行い、更には機器を用いて測量などの科学的調査を行っている。湊長安は先行して植物の採集やその標本づくりや乾燥などにあたっていた。

一行は1826年（文政9年）2月15日の早朝、出島を出発した。長崎街道を小倉まで1週間かけて歩き、途中嬉野の茶や、温泉にも入って泉質も調べている。2月22日に、関門海峡を測量しながら渡った。この他各地で緯度、経度も測定しているが、このようなことは本来禁じられており、オランダ通詞たちは黙認してくれたのであった。こうした行動を商館長のスチュルレルが快く思うはずがなく、各地でのシーボルトの人気もあって、両者は次第に対立してゆくことになる。シーボルト自身も相当傲慢だったようだが、彼自身は自分の側に非はあったとは全く思っていなかったのである。こののち海路を東に進み、3月7日には室津（兵庫県揖保郡御津町）に上陸し、再び陸路を進むことになった。3月29日、愛知県の宮（熱田）で医師・植物学者である伊藤圭介らと会っている。彼らの正確な知識に感心し、圭介に長崎への遊学を進めたのであった。こののち圭介は日本の植物学の発展に貢献したのであった。

4月10日ついに一行は江戸に到着した。齢80歳を超えた島津重豪とその子で前中津藩主奥平昌高に大森で出迎えを受けたのであった。そして定宿となっていた日本橋の長崎屋に落ち着いたのである。翌日からは医師や蘭学者など多数の人が彼のもとへやってきたのである。将軍侍医の桂川甫賢・土生玄碩、津山藩医宇田川榕庵、蘭学者大槻玄沢などである。

この中で眼科医であった土生玄碩は散瞳薬を使った瞳孔を開く治療に興味を持った。この薬の成分をなかなか教えてもらえなかったので、彼は將軍家の葵の家紋の入った羽織をシーボルトに与えた。それで原料がペラドンナと同じ成分のハシリドコロ（ナス科の多年草）という薬草であることを聞き出したのである。

4月16日には最上徳内が訪ねてきた。彼は蝦夷・樺太を何度も探検した幕府の元役人である。彼は極秘で地図などを貸し、多くの情報を与えたのである。彼はシーボルトを数度に渡って訪問しており、帰りには小田原まで一行を見送ったのであった。また、最上の紹介で間宮林蔵にも会っているのである。4月18日には幕府天文方で書物奉行である高橋景保が訪ねている。彼は地図の作成や洋書の翻訳などの責任者であった。3回目の訪問の時、シーボルトはロシアの軍人クルーゼンシュテルンの書いた『世界周航記』と交換に、日本・千島・樺太の地図を貰えないかと持ちかけた。最初、景保は禁制品であることからためらったが、『世界周航記』がどうしても手に入れたいこともあり、やむなく応じたのであった。これが後にシーボルト事件になっていったのである。

江戸到着から3週間後の5月1日、ようやく11代將軍家斉へ拝謁がおとずれた。全く儀礼的なもので、大広間で頭を下げてひれ伏していると「オランダ・カピタン」と声があがったかと思うと、あっという間にすべてが終了したということであった。シーボルトは江戸での滞在を延長し、さらに調査活動を進めたいと願ったがこれは却下された。一行は5月18日江戸を発ち帰路についた。143日に及ぶ大旅行を終えて長崎に帰ったときはすでに7月7日になっていたのである。

6. シーボルト事件

江戸参府の翌年、1827年（文政10年）7月、東インド政庁は商館長スチュルレルとシーボルトを帰国させることにし、彼にはそのコレクションの整理と活用に専念させようとした。そこで彼は1828年の船で帰国する準備を始めていた。シーボルトは1828年（文政11年）2月、江戸の高橋景保に小包を送ったが、その中に間宮林蔵宛ての小包も同封していた。開封した景保は林蔵宛てのものを彼の屋敷に届けた。林蔵は、外国人との交信は固く禁じられていることから、これを開封せずに勘定奉行村垣淡路守（元御庭番）へ届け出したのである。これが発端となって、景保や彼の部下である下川辺林右衛門が捕えられ、多くの日本人も連座して取り調べを受けることになったのである。これまでは暴風雨で座礁したコルネリス・ハウトマン号から禁制品が多数発見されたというのが通説であった。近年の梶輝行氏の研究では同船に積まれていたのは、船体の安定を保つためのバラスト用の棹銅（銅の地金）だけだったという。

1828年（文政11年）12月16日、出島のシーボルトは日本地図などを押収すべく、訊問と家宅搜索を受けた。しかし、なかなか応じないので、奉行所は新商館長メイランに対してシーボルトから禁制品を取り上げて差し出すよう命じた。それでも拒否し続けていたが、関係した日本人にも罪が及びそうになると、手元にある地図は写したあとに差し出すことにしたのである。シーボルトについては出国禁止措置が取られ、出島に軟禁されることになった。文書による訊問が執拗に続いたが、彼ものりくらしと回答して、日本人の名

前などは決して明かさなかったのである。この間、事件は広がってゆき、オランダ通詞の馬場為八郎、吉雄忠次郎らが、景保との文書受け渡しのかどで入牢となった。江戸では羽織を贈った土生玄碩や役人、長崎屋の主人などが捕えられている。シーボルトは自分に協力してくれた多くの日本人に事件が拡大していることに心を痛め、日本に帰化したいとまで訴えたがこれは却下されたのであった。1829年（文政12年）3月、高橋景保は拷問により獄中で死亡した。まだ、判決は出ていなかったのに、遺骸は瓶に入れられ塩漬けにされたのであった。

1829年（文政12年）10月22日、シーボルトに対する申し渡しは、品物は没収のうえ、国外追放と再渡航の禁止、であった。すでに出国している前商館長スチュルレルも管理不行届きにより国禁とされた。関係した日本人については、翌年1830年（天保元年）1月10日、土生玄碩とその息子に改易が申し渡された。獄死した景保には「死罪」、2人の息子には遠島、その他追放、押込、叱りなどの判決を受けた。通詞の吉雄忠次郎、稲部市五郎、馬場為八郎は江戸に送られ、大名預けの永牢となり、いずれも生きて長崎の地を踏むことはなかったのである。1829年（文政12年）12月30日、シーボルトは出島を出航した。娘いねの養育については、高良斎や二宮敬作ら信頼する門弟に託したのである。オランダ船が長崎港外の小瀬戸にさしかかった時、良斎と敬作は、たきといねを小舟に乗せて最後の別れをしたとのことだった。

7. その後のシーボルト

1830年7月、オランダに戻ったシーボルトは多くの人々から歓迎された。その後はライデンに住み、コレクションの整理と著作の執筆に力を注いだ。そのころ、フランドル地方の住民がフランスの7月革命の影響を受けて、オランダからの独立を叫んでいた。シーボルトのコレクションはオランダ各地に分散して保管されていたが、政情不安もあって次第にライデンに集められるようになった。そして、その研究成果は3つの大著として出版されたのである。代表作の『日本』は日本の地理・歴史・風俗・政治・経済など、幅広い分野にまたがる20分冊に及ぶ大作であった。1832年に第一分冊が刊行され、1851年に第二〇分冊が刊行されたが、そのあとに予定していた残り二冊はついに出版されなかった。この大作の刊行には、広東人の郭成章と同郷のホフマンの協力があった。これは大変な著作であったが、日本の開国とその後の急速な近代化により、その価値は当初に比べて残念ながら薄れて行ってしまったのであった。

シーボルトは日本の動植物についても出版を計画しており、『日本植物誌（フロラ・ヤポニカ）』、『日本動物誌（ファウナ・ヤポニカ）』を刊行した。この2つの大著により、日本の動植物を見事に紹介したのである。これらの出版のための資金援助の要請のため、サンクト・ペテルブルク、モスクワ、ベルリン、パリ、ウィーンなどを回っている。1834年、ロシアでは日本近海に詳しいクルーゼンシュテルンに会い、間宮林蔵が樺太が島であることを発見したことを報告した。彼は樺太は陸続きであると思っており、大変驚いたと記録されている。1845年、49歳の時、25歳年下のヘレーネ・フォン・ガーゲルンと結婚し、この後3男2女を授かったのであった。

アヘン戦争による清の敗北を受けて、幕府は1842年（天保13年）、異国船打払令を撤回して、薪水給与令を新たに発令した。これを機に諸外国が日本を開国させるため接近する恐れが出てきたと考えたオランダ政府は、鎖国を続ける危険性を警告するウィルム2世の親書を用意した。これについてシーボルトは意見を求められ、書簡も彼が起草したのである。また、オランダはアメリカが開国を求める使節の派遣計画があることを知るとその情報を日本に伝え、オランダとの条約交渉を提案したが幕府は応じなかった。シーボルトはペリーの日本遠征計画に同行を希望したが、国外追放を理由に拒否された。また、彼はロシア政府にも働きかけ、その進言を取り入れた条約案はプチャーチンによって日本にもたらされた。しかし、プチャーチンが長崎に着いたとき、すでにペリーが浦賀で交渉に入ってしまったのであった。

長崎では最後の商館長クルチウスが長崎奉行に対して、シーボルトの追放解除を要求していたが、1857年（安政4年）ついにこれが認められた。1859年（安政6年）オランダ貿易会社の顧問の肩書で、12歳の長男アレキサンダーを伴ってマルセイユから地中海、紅海、インド洋経由で日本へ向かった。そして8月14日、30年ぶりに長崎に到着したのであった。二宮敬作やたき、いねと感激の再会を果たしたのである。その後1861年（文久元年）6月、幕府の顧問となり、江戸の赤羽応接所に入った。これにはシーボルトに政治的活動を望まないオランダの総領事が反発し、わずか4か月で解雇されている。失意のうちに長崎に戻り、1862年（文久2年）5月7日、日本を離れバタビアに向かったのである。帰国後、1863年10月には政府の仕事を退き、故郷のヴェルツブルクに帰った。博物館の準備のためミュンヘンに滞在し、なおも精力的に活動していたが、風邪から敗血症をおこして、1866年（慶応2年）10月18日、波瀾に富んだ70歳の生涯を終えた。「私は平和の国へ行く」と死の直前に呟いたと伝わっている。

8. まとめ

シーボルトが出島に居たのは文政6年～12年のわずか6年であった。年齢も27歳～33歳の間である。30歳前後の青年がこれほど人々の記憶に残った例はあっただろうか。彼は日本のあらゆる調査という使命を帯びてはいたが、その成果は期待をはるかに超えものであった。そのため日本全国から学問を志す多くの若者が彼の下に集まったのである。彼自身の学問に対する探究心とその根底にあり、それを慕って来たのであった。シーボルト事件の後、若者達はそれぞれの故郷に帰ったが、その多くは藩医に登用されるなど、後の近代化の礎となっていたのである。

晩年、シーボルトは日本の平和的な開国のために尽力した。そして、再来日を果たしたものの成果を上げることは無かった。彼の再来日の前年（1858年、安政5年）、開国した日本は急激な変化を起こしつつあった。その変化は彼の想像をはるかに超えており、時代が彼を追い越して行ったのである。

出島に来航した医者、地図を持ち出そうとした事件の当事者としてのイメージが強いシーボルトではあるが、多くの若者達を通じて明治日本の近代化に大いに貢献することになったのである。また、日本を本当に愛し、日本の良さを我々日本人と世界中に紹介してく

れたのであった。(完)

【参考文献】

「シーボルト先生其生涯及功業」(呉 秀三著：平凡社)

「江戸参府紀行」(シーボルト著 齊藤 信訳：平凡社)

「花の男 シーボルト」(大場秀章著：文春新書)

「ケンペルとシーボルト」(松井洋子著：山川出版社)

「シーボルトのみたニッポン」(シーボルト記念館発行)

「文政十一年のスパイ合戦」(秦 新二著：文春文庫)

「黄昏のトクガワ・ジャパン」(ヨーゼフ・クライナー編著：NHKブックス)

「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」の、えどはくカルチャー資料

「書簡が語るシーボルト像」(講師：宮坂正英 長崎純心大学)

この他、日本シーボルト協会、ウィキペディアの資料を参考にした

資料の写真はウィキペディアから掲載した